

SORD の現状と課題

Survey Research and Data Archives in SORD

大國 充彦

札幌学院大学には総合研究所と言うのがございます。その中に現在ある各学部がそれぞれの常設の部会として編成されており当然、社会情報部会も有るわけです。SORD(社会意識・調査データベース)は社会情報部会とは別の組織という位置付けで、総合研究所のSORD 特設部会という形になります。先ず問題になってくるのは施設の問題です。既に新國三千代先生などが中心になって1990年代に始められた、社会調査のデータ、そのようなものの蓄積場所を、札幌学院大学社会情報学部の社会情報調査室、C館404号室を借りて置かせて頂くという形をとっています。予算に関してもこれまでは社会情報学部の研究予算でやっていましたが、組織的には総合研究所の中の位置付けになるため、総合研究所が予算を申請する、そのような形で、この3~4年は予算会議など色々と折衝を重ねつつ何とか延命をしてきましたが、自動的に降りてくる予算は来年度までとなりました。その先は自力で獲得をしていかなければいけないというのが、現在の状況です。

予算の自力獲得は当然です。それで、現在打っている手としては、学内の研究促進奨励金に応募する。これは実際に今日が申請書の締め切りで既に申請済みです。一年間で50万円の促進奨励金を得ることを目標としています。勿論、それに関する研究計画等もございますが、問題なのは2014年度以降です。それ

に関しても総合研究所が設定している、研究促進奨励金の中で重点研究というジャンルがございます。これは私立学校の研究促進費を獲得するためのカテゴリーで、2年ないし、3年という年度計画の研究を採用する、ということになっています。現在の空枠は有りませんが2014年からは枠が空いているということなので、2013年度中に申請する機会が訪れる訳です。今年の5~6月位になると思いますが、それに応募して年間150万円×3年間という研究計画で申請する予定です。そうしますと、2013年プラス3年間の計4年間で何か少し掘り下げたことが出来るであろうと思います。その間に科学研究費の申請もして、3年から5年程度のスパンの科学研究費を狙って、中期的には予算の獲得を行おうと考えているところです。これが現在の位置付けと取り分け、財政的問題が近々の問題になっています。

SORDの活動としては、当初から行われていた社会調査データの二次利用を中心とした活動を行っています。ここでもいくつかの課題が有るわけですが、故廣井脩先生が寄託されたデータセットをどのように扱うのかは、この先問題に成るわけですし、何らかの形で権利を移譲されている廣井先生のご遺族と連絡をとって、これを使えるように持って行きたいと考えています。ただ、いずれにしても当初からスタートしている、SORDのデータセットを公開して二次利用に供するという活動が現在も進行をしている一番古い活動の一

つです。

その次に、平成 18 年度から平成 21 年度までの科研費を受けて行った研究の中で、集めて来た資料があります。これらは小内先生などにも中心的に活躍をして頂きましたが、リージョナルという言葉が付いていますように、北海道の地域の資料に特化し、大きなプロジェクトとして行いました。

一つには北海道大学の布施鉄治先生が行った夕張調査（地域産業変動と階級・階層 炭都・夕張、／労働者の生産・労働一生活史・誌 布施鉄治編著）の調査票や関連資料を含め、段ボール箱で 60 箱に上る資料を、当時の北海道大学小林甫先生から委託されましたので、これらの整理をして夕張調査の全容を調査票ベースから捉え返す、という作業を行いました。これに関しても参考文献に載せていますが、科学研究費の調査報告書を出しております。この布施先生の夕張調査の資料の整理と合わせて、特に戦後の復興期以降の 1980 年くらいまでの間に、北海道ではどのような社会調査が行われていたのかということについて、調べてまとめたデータもご紹介します。

これら北海道の社会調査関連資料が一応は揃っていて、とりわけ夕張調査に関しては質問票等に関する整理も終了していますが、後に指摘しますようにいくつかの問題があり、まだ公開するまでには至っていません。これに関してもデータアーカイブズ運営上、あるいは研究上の色々な課題がありまして、それらを片付けていかなければならない状況です。

その次にもう一つ、今度は平成 21 年度から、この 4 月までの期間の科学研究費を本学社会情報学部の OB である中澤秀雄さんが研究代表者になっている科研の中でおこなっています。これは社会調査と言う形のまとまった資料を収集するという、以前の調査対象についての資料を集めようということです。これも後ほど指摘させて頂きませんが、北海道の

地域研究をおこなう上で重要な資料というのが、かなりの程度、野放しという大変ですが、基本的には散逸しています。炭鉱の主婦会、あるいは主婦会の上部組織である道炭婦協（北海道炭鉱婦人連絡協議会）といった、そのような組織が活動をしていて、当時の炭鉱所在地域に対してかなり積極的な意味を持っていた、というように良く言われますが、これを裏付けるような資料がまとまった形では北海道内のどこにも存在しない、ないしは日本全国のどこにも存在していないのです。バラバラに部分的な、断片的なものだけがポツポツとあるに過ぎません。

配布した A 4 縦の 1 枚目の「記憶の証言者」（そらちと産業遺産と観光）というところに A さんが載っています。

ちょっと注意をして見て頂くと、これは平成 15 年、今から 10 年前に取材をしました、ということが記されています。芦別は旧産炭地ですので、我々も調査に入っていて、炭鉱の主婦会の幹部だった方達にヒアリングを行っていて、2009 年以降何回か行っている訳ですが、この A さんにはお会い出来ません。ご存命なのですがかなり体調が悪く外には出られない、そのような状態だそうです。つまり、こういった記憶語りや文字として残ってはいても、それ以上に突っ込んで聞くことが出来ない。そういった年齢層に当事者の方たちはなっています。問題になってくるのは、こういった記憶語りをおこなう中で資料として、きちんとした裏付けが取れるのかどうか、というのは社会学のヒアリング調査においては決定的に重要な側面です。ただ聞いたことがそのまま事実ですよ、とは提示出来ない訳ですから、伺ったことの内容を公開されている資料や内部資料に基づきながら、きちんとした裏付けを取って行く必要がある訳です。そういった資料がこの炭婦協や炭鉱の主婦会といったところに関しては殆ど整っていません。それらをサルベージしなければ、救出し

なければいけない、というのが、現在、中澤さんは中央大学にいますので、中大科研の課題の一つになっています。

2011年の秋に釧路のこれも炭婦協の元会長の自宅倉庫に山積みになっていた、段ボール箱で8箱ほどの資料を既にSORDに搬入して、これらの整理作業を昨年からは始めております。2013年度はこれに関するインデックスを作成し、全てPDF化をして、整理、分類をし、まとめて行くということをおこなおうと思っています。それから、今年に入ってから、夕張市の労働組合の関係者の方ですが、その方が資料を集めているということは、数年前から分かってはいたのですが、その方と交渉をした中でこの3月16日に段ボール箱で30箱の資料がここに届きます。これらも同じように整理をして、PDF化をして分類をしていく必要があります。

そこで、先ほどの予算の部分とも関係するのですが、こういった科研費というのと、SORD独自の予算との区別を明確にしておかなければいけない部分が当然、出て来ます。勿論、科研の方は資料のサルベージまでは視野に入っています。ところがこの5年間の科研の中で何時、何処でどれだけの量の資料が見つかるのか、ということは予め想定は出来ません。したがって科研のところでは資料を見つければいいところまではやるのですが、その集めた資料、サルベージをした資料を整理する、分類するという作業は予算として計上をしていない訳です。そうすると資料の山がどさどさと来るところまではこの科研の仕事なのですが、そこから先の仕事をSORDで請け負うというのが、今考えていることの一つです。それがこの活動の3番目で、まだ本格的にはやっていませんが、サルベージされた地域資料の整理、分析をするというのが活動の一つに加わって来ている、そのようになっています。

このSORDの位置付けと活動という中で、

このような方向に勝手に舵を切って良いのか、という話もあるのですが、個人的には勝手にやって良いのだ、と思っています。と、いうのは、次のSORD設立の背景というところです。

SORD設立の背景には、次のような意図があります。つまり札幌学院大学発で社会情報学を誕生させるという意図が明確にあるというふうに、私は受け取っています。勿論、これは田中一先生の意図であろうと勝手に思っている訳ですが、ではどういうやり方をやるのか、一つに学外的には（日本）社会情報学会、これはJSIS（The Japan Society for Socio-Information Studies）という形で設立された訳ですが、学会を作ってしまう、これは現在のところもう一つの日本社会情報学会JASI（The Japan Association for Social Informatics）という学会と連携をする、連携をして研究大会などを合同で開催するというプロセスを経て合併をしまして、一般社団法人社会情報学会、SSIという形で発足した訳です。そして、伊藤守さんが初代の会長です。

そのような形で社会情報学会というものを作ることによって社会情報学を誕生させようという意図がある。これが札幌学院大学の学外的な方向性です。同じように学内ではSORDを作ろう。これは科研等の外部資金を導入して、共同研究を経て人的ネットワークの拡大を現実におこなっています。最初にも少し紹介をしましたが、新國三千代先生が中心となり社会調査のデータセットの寄託を受け付けるような、そういった科研の研究を経ています。原純輔先生、稲葉昭英先生、小島秀夫先生、盛山和夫先生、故廣井脩先生といった、稲葉先生はお若いですが、ある種御大の方々とのネットワークを作って行き、それがやはり社会学という領域の中で、社会調査に関連したSORDという組織があって活動をしている、ということは広まっていますし、これは多分事実だろうと思います。

その他にも先ほどの夕張調査の関連資料を整理した科研が一つあり、そこでは一応私が研究代表者をやらせて頂きましたが、勿論、学内の小内純子さんはもとより、社会情報学部OBの中澤秀雄さん（現在は中央大学）や祐成保志さん（現在は東京大学）といったメンバーが加わっています。他にも社会情報学部のTAとして勤務していた人達がメンバーに加わって行き、科研の研究活動の中で例えば、新藤慶さんという北海道大学の大学院生だった方は、新見公立短期大学を経て、今は群馬大学へ、同じく北海道大学の大学院生だった庄司（菅原）知恵子さんも現在は岩手県立大学の教員になっています。

そのような形でSORDを基盤として院生の人達がちゃんとした正規の職に就いていく、そういった教育的効果があったとも考えられますが、人的ネットワークが拡大していく訳です。専門学会の中ではあまり例の無い形でネットワークが形成されている。結構、これは特徴的なことだと思っています。勿論、これが社会情報学とどう関連するのか、という話になると、それはまだ分かりませんが、通常ですと学閥や学会閥、閥という言い方は少し変ですが、そのような繋がりでも共同研究が仕組まれるのが普通ですが、このSORDの科研、取り分け札幌大科研と中大科研のところでは、むしろSORDを基盤とした人的ネットワークの広がりでも共同研究が仕組まれていたり、それをもとにしながらさらに炭鉱研究の研究者達と繋がり、今の中大の科研が展開されていたり、といった形で共同研究に対する新たなスタイルを提示している、という意味では非常に積極的な意味がある、というふうに私は考えています。

いずれにしても田中先生は恐らく、札幌学院大学で社会情報学を誕生させようという、学外的な方向性、戦略と学内的な戦略との二本立てで構想されていたのであろうと。その内の一つがSORDである、ということに

なります。

こういった社会情報学誕生の為の戦略というのは、このような感じであると考えていて、まずは共通のプラットフォーム、要するに外枠だけを作ってしまう訳です。これは学外的には、学会という形で外枠を作ります。学内的にはSORDというものを作ります。こういうふうにはまず作ってしまう訳です。そうするとその枠の中で、個々の研究者が連携をしたり、個人であったり、活動を繰り返していく。そのさまざまな活動が進展して充実し、深まって行く、こういったことが考えられる訳です。実際に社会情報学会はそういった形になって、これはまた一つの大きなプラットフォームを作り上げた、ということになっているであろうし、SORDの方でも人的ネットワークが拡大し、新しい形の共同研究を生み出すということに繋がっている訳です。そして、さらにそれが展開をしていくと、このプラットフォームが最初は外枠としてのみ作って、柵だけが立っていた訳ですが、どのような理論化をすると良いのか分かりませんが、柵の中が何らかの形で熟成をしていく訳です。熟成をしていき、何かを生み出す母胎になって行く、というところが考えられる訳です。

これが果たして実現しているのかどうかの評価はまだ難しいと思いますが、少なくともそのような構想であろうと。それで、この母胎の中から社会情報学が生まれて行く、こういう戦略で学外的には社会情報学会を設立して、学内的にはSORDを作った、そのように捉えています。

私自身はこのように考えていますので社会情報学とは何か、ということは今こうであるというように断言を出来る訳ではないのですが、それぞれの人達の諸活動の中では社会情報学とはこうである、というものを持ち寄ってそれがぶつかり合う中で母胎が生まれて社会情報学というものが成立していくであろう

と、そういう戦略の中に SORD もまた位置付けている、というふうに考えています。その意味で社会情報学会と SORD というのは、社会情報学成立という観点からすれば双子のような位置付けにあって、それぞれが全く別の成果を生み出しつつまだ展開をしている、というのは面白いところだろうと思っています。

次は SORD の課題です。このようにして作られている SORD が現在、直面している課題の整理をする必要があります。本日の私の報告の中で一番重要だと私が考えているスライドがこれです。この一枚があれば今日の話は全部終わりだと思っているくらいですが、先ず一つに、考えなければならないのは、社会調査論というのはどうしても SORD にとっては必要になって来るということです。社会調査というのは何なのか、というところから考えて行かないと資料やデータを扱うアーカイブスとしては、かなり貧弱なものになってしまうので、社会調査論なるもの、ある種の原理論的なものはどうしても必要になってくると思います。

その次が運営上の課題です。ここがずらりと並ぶのは、あまり私がちゃんと手を付けていないので残ったままで申し訳ございません、というものです。まず、1～4まで、一番重要なのが2の1、データ寄託者との関係を明確化する必要性が出て来ています。先ほども少し触れましたが、データを寄託して下さった先生方がお亡くなりなられた場合に、そのデータの著作権や所有権をどのように扱うと良いか、これに関しては、かなり明確なやり取りをしておかないといけない。現在、廣井脩先生からお預かりしたデータはこの明確化が出来ていないが故に公開が出来ないという形にせざるを得ない訳です。さらにもう一点、あまり考えたくは無いのですが、もし SORD の維持が出来なくなって解散をする、という時に寄託データをどう処理すれば良い

のか、この取り決めも行わないといけない訳です。しかし、これに関してもまだ取り決めを行っていません。この辺に関する明確な考え方や方針を打ち立ててデータの寄託者である先生方ときちんとした取り交しをしなくてはならない、と考えています。

その次が二番目ですが、データの利活用に關する課題、これもかなり大きなことで、先ほど札学大科研で夕張調査資料の整理が出来ている、という話をしました。プライバシーポリシーをどのように設定するのかということが、公開あるいは二次利用のために提供をする、という観点からかなり重要です。例えば原純輔先生のデータセット（青少年の性行動全国調査）のように量的なデータであれば、個人情報に殆ど含まれておりませんので、それほど特段、プライバシーポリシーを明確にする必要がなく提供をすることが可能です。質的データの場合、聞き取り調査のデータについては、知っている人から見れば個人が特定出来てしまう訳です。そのようなデータを無条件に公開するようなことは先ず出来ません。

現在の社会調査、とりわけヒアリング調査、聞き取り調査のデータは基本的には調査終了後に破棄する、という立場を支持する先生方も結構いらっしゃいます。これは3年前の社会学会で札学大科研の報告をした際に、一般社団法人社会調査協会の細谷昂先生や、大谷信介先生などはそのように仰っていて、今の調査データというのはもう殆ど残らない、と。例えば、布施鉄治先生の調査のような大規模調査のデータも、恐らく現在ならば個人情報やプライバシー保護の観点から破棄するのではないかとおっしゃっていて、むしろだからこそこうやって残っているデータを整理した、という業績は素晴らしいという言い方をされていました。現在のところ、やはりその辺をかなり詰めて考えないといけない点であろうと思っています。ただ、この点に関して

は個人情報保護の観点から、生活をしている人たちの個人情報、自治体や福祉事務所が把握しているような個人情報が外部に漏れないようにしていた訳ですが、それが例えば障害者の孤立死のような問題に繋がっていく、個人情報を外に出さなければそれで良いとは必ずしも言えない状況が一方では起きているわけです。社会調査に関する個人情報に関しても、どのようなハードルをクリアすれば、それは使っても良い、公開をしても良い、ということになるのか、この点に関しては今後きちんと考えないといけない問題だと考えています。

2の3の情報発信、これはWebサイトですが、これまでSORD自体が先ほど指摘したように、学内の共同研究プロジェクトということもあり、SORDのデータは学部内で管理するサーバー上で運営をしていましたが、やはりそれが難しくなってきた。それで今考えているのは電算機センターへ正式に移管して保守点検はそちらでやって頂き、内容の更新などはこちらで行う、というような住み分けを明確に行う必要が今後出て来ていますので、今これは交渉中です。

それから、運営上問題の4番目ですが、国外とまでは言いませんが、国内の他のデータアーカイブズとの連携を、やはりもう少し積極的に考えていく必要があると、東京大学のSSJDA (Social Science Japan Data Archive)や立教大学のRUDA (Rikkyo University Data Archive)といったデータアーカイブズが存在していて、特にSSJDAの方は国際学会等で報告をなさる時にSORDについて言及をして良いか、という問い合わせをいつも下さっており、それなりにこちらのことを気にして下さいます。ただ、SORDとしてはデータアーカイブ、あるいはデータアーカイブズという形での研究上の発信をしていませんので、SSJDAとどう連携をして行くのかというのは今後の課題だろうと思

います。RUDAとは、高田洋さんを窓口に引っ張り込んでしまった形ですが、現在連携をする形を作ろうとしているところで、こちらも今交渉をしている最中です。

運営上の課題が山積している中で、当然、ただ運営をすれば良いということでは無く、学術的な課題もあります。大きく分けると二点あります。3の(1)の方は、データアーカイブズ固有の資料やデータそのものについての研究を行う必要がある。とりわけ、社会調査というように領域が限られている部分があるので、それに関して資料をどのように分類するのか、ということはかなり大きなテーマである。これに関しても札幌大科研の時に共同研究のメンバーであった庄司(菅原)知恵子さんが資料の分類について、かなり重要な知見を提示して下さいます。資料やデータについての研究が一方であると同時に集めた資料、あるいは整理したデータ、これらを使って研究をするということも当然行う必要がある訳です。

布施先生の夕張調査、これに関する研究は、それなりに一定の成果を上げたと考えておりますし、現在、法政大学の西城戸誠さん、彼も以前は社会情報学部のTAだったのですが、彼と私とで一緒にやっている北海道内の炭婦協、これは後ほどお話をしますが、炭婦協の主婦会に関する研究といったものがこういったサルベージされた資料の裏付けを持って、今少しずつ進展をしているという形になっています。データアーカイブズとしては学術的には資料を集めます、という側面の課題、学術的な課題と同時にそれをどう使って研究成果として発信していくのか、使ったという形の研究をどう進展させるのか、この二点はどうしても外せないであろうと考えています。

現在のSORDの課題というのは、一つには非常に原理論的な社会調査というところから、データアーカイブあるいはデータアーカ

イブズをどのように考えていかなければいけないという、かなり大きな課題と同時に運営上の諸課題、これをクリアしていかなければならない。ただ、この中でも特にプライバシーポリシーなどに関しては運営上の課題というだけではなく、こういった学術的な営為の中で集めたデータ、資料、あるいは個人情報などをどのように扱っていくのかという、かなりそういった意味では研究という領域に入っていくような問題になるのかも知れない訳です。ですから、このプライバシーポリシーの問題は3の1の方の、資料・データについての研究の中に含まれていく可能性があります。データアーカイブズ SORD として、ただ単に運営をするのではなく、資料、データをどういうふうに捉えるのか、という研究やそれを使った研究をやはり推進していく必要がある、こういうふうな形で現在の課題を整理してみたのが、ここのスライドになります。個人的には今日、これを作ってかなり満足をしていて、ああそうか、こんなに大変だったのだと思って、4月からは少しこれに特化して本格的にやっっていこうと思っています。

先ほど、社会調査論という話をしましたが、これはどのような切り口があるのか、まだ思い付きの段階ですが、社会調査とは、といって元東京大学の佐藤健二先生が変な言い方をしています。そのような言い方をしなくても良いでしょうと思うのですが、社会認識を生産するための実践なのだ、という変な言い方をしています。これはどう考えると良いのか、私は良く分からないのですが、認識する、生産する、実践する、というある種の研究者の主体的な行為を三通りに表現をしていって、それぞれの対象が社会であったり、社会認識であったり、社会認識の生産であったり、何かこの辺で佐藤先生は何かを言いたいのであろうと思うので、こんな辺りを切り口にしながら社会調査論というものを SORD として考えていく必要があると思います。勿論、こ

のような社会認識を生産するための実践だと言うだけでは解釈は多様であって、どうとでも取れるのですが、このような形のものから、切り口としてやっっていこうと思っています。

こんな言い方が良いかどうかは分かりませんが、社会調査は一連のプロセスな訳で、どこが始まりでどこが終わりなのか、実は定かでない。そういったプロセスを何らかの基準で分節化する必要がある。その分節化したそれぞれのパート、パートで一体何が対象で、それに対する主体的な働きかけはいったい何なのか、ということを経相対化するようなそのような視点を獲得するような方向で、ひとまずは考えてみよう。抽象的な言い方なので、何か特に凄いことを言った訳では無くて何かこのような感じということに過ぎませんが、そのように思っています。

このようにそれなりに社会調査に関する原理的な考え方がある程度作って行くと、その資料やデータといったものがどのような位置付けを与えられるのか。位置付けといってもその特定の研究に関して、この資料は価値があるということが一方ではあるのでしょうか、そもそも資料とは、データとは何か、そのような話も可能になってくるのかと思う訳です。だからこそ、社会調査論からいえることですが、実際に資料やデータを使った研究成果というものがないと、上手くフィードバックしていかないと思っています。

社会調査には資料調査があって、観察という調査のスタイルがあり、質的調査、量的調査、網羅的ではありませんが、よく言われるのがこういった調査がある。それぞれに当然、資料を必要とし、あるいは資料を生み出していくという形になる訳です。SORD が預かっている資料やデータをこの社会調査の類別で整理しておくことこのようになり。量的なデータと呼ばれるものは原先生のデータなど、現在公開しているデータが主です。質的なデータは先ほどのプライバシーポリシー

の関連で公開が出来ていませんが、布施鉄治先生の夕張調査のデータなどがあります。さらには東京大学の似田貝香門先生の行った東京調査の資料なども未整理のまま残っています。それから現在、私が取り組んでいるのはその次の資料というもので、これは一応、釧路資料と、夕張資料の二つがあります。釧路資料はこの4月から、先ほどの学内研究奨励金で分類をしようとしているものですが、段ボール箱8個ほどの主に炭婦協の主婦会に関わる資料です。夕張資料は段ボール箱30個程度ですが、これは炭婦協主婦会だけではなく、恐らく炭鉱労働組合の資料もかなり含まれていると見通しを立てています。

この資料やデータをどのように分類するのか、といいますと以前の札学大科研の時に庄司（菅原）さんが、何と言いますか発見したという大変ですが、言われてみると当たり前なのですが、布施先生の夕張調査の資料が山ほどある訳で、その分類をしていくなかで、どうもこういうふうに分けるとどれが貴重でどれが貴重でないか、ということが分かって来る、というようなマトリックスです。縦軸は夕張調査を行っている調査者達、研究者グループですね。これがオリジナルに作ったものなのか、それともその人達が既にあるものを集めて来て調査の参考にしたような、調査グループからすればオリジナルでは無いものなのか、というオリジナルと非オリジナルの縦軸、さらにその資料が公開することを目的に作成されたものと、公開は特に考えていないような形で作られているものがあります。こういうような分類をすると段ボール箱でどかつと来たものを一先ず、仕分けし易いのですね。

オリジナルで公開するもの、例えば研究論文として公開します、と作成したものがあります。あるいは学会の報告要旨だったり、内輪かも知れませんが研究会の報告レジュメであったり、これはオリジナルでしかも公開を

前提にするような資料として位置付く訳です。そして同じオリジナルですが、公開を特に考えていないで作成しているようなもの、調査ノート、これは北海道大学の小林甫先生が調査ノートを取っている、これが実は非常に夕張調査の分析をする上で役になった訳です。あと、具体的に個別の調査票ですが、これには実際に小内純子先生も若いころ、実際に自分が行って調査をしたようなものも含まれているような、そういった調査票、原本、その原本からコーディングして書き起こしたよもの、そういったものが含まれている訳ですが、こういったものは当然、これを使って研究論文をまとめる訳ですから、公開は前提にしていない、非公開の資料という位置付けになるわけです。では、今度調査グループが作っていないものとして雑誌の記事、書籍、組織の会報、そういったものが含まれている訳です。非オリジナルで非公開というものが例えば給与明細などはかなりの束で段ボール箱の中に資料として含まれていたりします。

夕張調査の資料を分析している中では、この非公開に当たるこちら側のもの、これが極めて重要であると。データアーカイブとして保存をするのならこちら側でしょう、と考えていたのです。ところが今度は北海道の炭婦協、夕張繋がり炭鉱関係を漁って行く中で炭婦協の研究を始めて行くのですが、そうやって来た時に実は公開されているものでもこちら側、これは少なくとも残っている確率が高いです。レジュメは無理だとしても論文や学会の報告要旨集というのは、基本的に大学の図書館やどこかの図書館に行けば必ずある訳ですから、要するに組織が継続する可能性が高い所に有る資料な訳です。こちら側が問題になってきます。とりわけこの組織の会報というのが非常に大変で、組織がなくなると当たり前ですが資料もなくなるのですね。その辺が段々と分かってきた中で資料の分類、まずは調査者のところに残っているよう

な資料だとすると、非公開のものというものが重要ですが、調査対象によってはこちら側、公開されているはずのものが入手出来なくなっているという状況もある、ということが段々分かって来ました。この資料データを用いた研究として、炭鉱主婦協議会の事例を少しだけ紹介します。

炭婦協の資料はまとまった形では所蔵されていないです。縦の方でプリントアウトしたお手元の資料で「便り」というもの、これは「炭婦協便り」なのですが、これはそもそも通巻でバックナンバーがフルに揃っている、ということがない訳です。最初はポツポツと目に付く形で、この研究を初めて数年間はどこかにまとまってあるに違いない、と思いがながらも探していましたが、まとまっていませんでした。こういった資料で一体どういったことが分かるのか、という色々なことが分かります。例えば最初の、その横になっている炭婦協便りの昭和47年4月20日版ですが、これは会長がBさんなのです。Bさんは炭婦協でいえば第一世代に属する、今は90歳を過ぎていますが、幸いなことにお元気なので何度かインタビューに行っていますが、この方が会長の時の話です。そうすると昭和47年ですから、1972年です。閉山阻止闘争がこれから本格化するという時期で、まだまだ炭婦協が元気な時期なのです。その次のところを見て下さい。今度はそれから数年後の昭和53年、1978年ですね。今度は会長がCさんになって、Bさんは副会長に下がっている、という形が見て取れます。その次にこれが重要なのですが、政治局員と言う形で市議、町議の方、三名の名前が出ています。冒頭のWebからのコピーにあるAさんというのは、芦別市議としてそこで政治局員の位置付けを与えられているのが、分かるかと思います。

炭婦協はこのような形で自治体の女性議員を排出するという一方で、女性の政治参加に関してはかなり社会的には一定の機能を果た

していることが分かるのですが、これがこう言った形で見ることが出来る。さらに昭和53年、1978年「新春のお喜びを申し上げます」の左の方、各支部会長、これは北海道炭婦協の組織ですので、北海道の話です。夕張、清水沢とずらりと並んでいます、この中で何人かの方にヒアリングをすることが出来ました。

三番目のDさんは同じように夕張新鉱の主婦会会長だったのですが、新鉱事故が起きた際は夕張市議で女性の議員で、しかもその時は市議会の議長をしていた。非常にそういう意味で経歴的には面白い方で、一度インタビューをさせて頂いた時にも、このDさんあたりは炭婦協第二世代になっていて、第一世代に対する距離感を持っているようです。ただ、この方は昨年お亡くなりになってしまって、もうお話を伺うことが出来なくなってしまいました。真ん中より少し左の幌内のEさん、この方は今もお元気で昨年も三回目のヒアリングをさせて頂きましたが、Dさんと同じように第二世代に当たっていて、やはり第一世代と第三世代との間に温度差があります。一番左側の釧路太平洋炭鉱のFさん、この方は北海道炭婦協の最後の会長です。ヒアリングの中で聞いたものが、こういう形の資料と照らし合わせて行って、それぞれの人との関係というのをさらに立体的に考察することが出来るのが面白いところかと思えます。さらにこの資料は最後のところは同じように「便り」ですが、これは平成6年で、1994年ですね。炭婦協は1995年に解散をします、もう殆ど最後の時です。この時の会長は先ほどのFさん、事務局長は赤平のGさんになっています。この辺は第三世代という形で一最後のところを支えていた人達です。

第一世代、第二世代、第三世代とおおづかみに分類しているのですが、こういったことが一体なぜ起きたのか、ということも定期大会の配布資料などを丹念に見て行くと、その

時々でこの組織がどの活動に重きを置いているのか、ということが分かって来たり、あるいは事務局ノート、これはBさんが丹念に記しているノートがあるのですが、こういった「便り」に載せる原稿の前段階でこのようなことを書かないといけない、という資料があったり、「炭婦協五年史編纂のための基礎調査」、調査票にそう書いてあるのですが、これをおこなっていたり、こういった資料がようやくサルベージすることで見つかった。こういった資料は今のところ、どこにも所蔵されていません。資料のサルベージは中大科研で行っていて、釧路資料段ボール箱8個と夕張資料が見つかって来ていて、釧路資料に関してはピックアップしたものを使った研究報告なども西城戸さんとやっているのですが、本格的にきちんと整理をしてインデックスを作ろうというのが、この4月から計画です。さらに夕張の資料はその先、2014年の4月位から作業が出来ると良いな、と考えています。

炭婦協とは何か、という話を少しします。この左側は炭鉱労働組合、炭労というもので1960年前後の三井三池闘争あたりが最盛期で動員数が50万人くらいの大規模な労働組合だった訳ですが、1960年以降、石炭産業がどんどん合理化、あるいはスクラップアンドビルドで衰退して行きます。この炭労と炭婦協の関係ですが、働き手は殆どが男性でしたので、夫が労働組合に入っていて、その家族から一名、各地域、山ごと炭鉱ごとの主婦会にメンバーを出しなさい、というようになっていて、労組に入っている人の妻や娘が主婦会に入ります。主婦会は主婦会費を徴収するので、基本的に経済的、財政的には労働組合から相対的には自立しています。ただ、勿論、労組からの援助金は毎年定期的な額はあるのですが、基本的には財政的に独立しています。例えば北海道であれば各山々の主婦会が炭婦協、北海道炭鉱主婦協議会、道炭婦協、というのですが、これの統括の中で活動をするこ

とになる。道炭婦協の上が全国組織である日本炭婦協です。基本的に大体は1950年くらいに設立されていくのですが、最初は九州の炭鉱の人達と北海道の炭鉱の人達が交互に会長を出していました。その内に九州の方が先に合理化が展開をしていき、北海道の方が、たくさん炭鉱が残っている状況になると、全国組織の会長は北海道炭婦協の会長が兼任をする、という形が続き、最後までその体制は変わらずに終息していくようなそのような感じになっています。

次の資料ですが、炭婦協五年史、ですから1960年～1961年くらいの時期ですね。五年史を作る為の基礎調査を行っています。会員それぞれの支部、一つの山の主婦会と構成会員数が何人かというようなことが、細かく調査されていて、これはそれを集計したものです。こんなふう集計データを使うと、このようにして炭婦協主婦会研究会というのを資料やデータを使いながらやっている訳ですが、社会運動論的な観点と地域社会学的な観点という、二つの意味を持ってくる。この辺は社会学の中身ですので今ここで詳細に話す気持ちは無いのですが、一つには社会運動論的な観点、所謂ジェンダー論というところからは、この炭婦協の主婦会の活動は従来、ネガティブに評価されることが多かった訳です。というのは要するに主たる労働力である男性に経済的に依存している妻や娘の活動あるということで、ジェンダー論的に見ると男女の性差を固定する、ないしは強化をするような活動だという意味でネガティブに評価されることが非常に多いです。ただ、そういった、これは同じ天野正子さんですが、社会変革の主体として一定の機能を果たしているという再評価も始まっています。それが最初の地方議員の排出、女性の政治参加として評価をすべきであるという考え方や、あるいは炭鉱所在地の女性に対して、もちろん主婦会のメンバーだけなのですが、学習の機会を提供すること

で社会との接点というものを提供することになっている。そういった形で一定の機能は果たしている、ということを再評価するような方向に移って来ています。これが基本的に資料の裏付けできちんと言えて行くのがこれから重要になる。その為の資料が、今あります、ということになります。

もう一つは地域社会学的な研究でこれはまだそれほど大きく展開が出来ていませんが、平成に入って最終的に閉山していく炭鉱が北海道にはあります。芦別、赤平、幌内、歌志内の四つがありますが、これらはそれぞれ主婦会の会長とコンタクトが取れ、ヒアリングが出来ています。あとは資料の裏付けを通して、それぞれの主婦会レベル、現場での活動、炭鉱のある町での活動というものが、一体それぞれどのように違っていたのか、それと同時にそこで活動していた、先程、名前の出た赤平のGさんなどは今でも赤平のボランティア活動や地域活動をしていますし、女性団体のリーダーになって地域活動を積極的に行っています。そのように主婦会の会長だった人達が主婦会解散の後にも地域社会のかなり重要な活動の担い手として、色々なことをやっている。そういったことをどのように評価していくのがこれからの課題です。課題として重要なのは、とりわけ地域社会学の観点から重要なのは、地域社会において中間集団が衰退するというのはマクロな構造分析ではすでにいわれていることですが、この中の一つのモデルとして、事例として主婦会活動がいかにして衰退して行ったのかを構造変動と結び付けて議論をしていく、というようなことが展望出来るわけです。まだ、これからですが、そのようなことをやりたいと思っています。

実際に炭婦協の研究等を通して見えてくるのはこういったことだと。一つには母体となる組織が解散すると資料は散逸する。炭鉱会社が倒産すると、その労働組合も当然解散する、主婦会も連動的に解散してしまう、こ

うなった時に資料の置き場所さえなく、整理保管をする人すらいない訳です。資料は簡単に散逸してしまう。このことを踏まえて何らかの形で資料をサルベージする必要がある訳ですが、その場合、公立図書館や博物館にも当然限界があります。釧路市立博物館の学芸員の方は非常に熱心にそういった資料を集めようとしています。やはり博物館にも予算の限界があり、先ほどの釧路資料などをいきなり引き受けて整理をするというのは、とても出来ないという話でしたので、ではこれを整理させて下さいという形で、我々の方で引き受けて預かっています。

あるいは芦別の星の降る里百年記念館の学芸員は個人ベースで、芦別の地域資料を集めていて、利便性を図ってくれるのですが、しかしそもそもそういった資料を探しに出るほどの予算はないということを言っています。こういった公的機関と連携をすることも、大学のデータアーカイブとしては今後、重要な課題になってくるだろうと思っています。

資料が散逸する、公的機関にも限界があるとなると、大学にデータアーカイブというのは、今のところ非常に限定的ではありますが、そういった資料は積極的に受け入れる方向で活動をして行くのが良いのではないかと考えている訳です。こんなふうにしてSORDの現状と課題ということで、リージョナルデータアーカイブズという形で、SORDを今後も展開させて行きたい、それは恐らくそこから何か生まれていくかは分からないにしても、SORDを設立した時の主たる意図にかなうものであろうと考えています。以上で報告を終わります。どうも有難うございました。

(拍手)

司会：では、少しだけ質問を受けたいと思います。

A：散逸してしまうデータを引き受け手になって、集めて、サルベージとか仕分けとか

整理するという事業は地道ですが大事な作業だと思えます。それを学部協力を結びつけるという可能性を少し考えたのですが、ゼミかあるいは社会調査関係の科目ということで、学部の学生がそれに関わる、単に労働力として関わるとあまり意味が無いと思えますが、そういったことに関わって作業を通じて何か見えてくるとか、なにかしら貢献をするとか、わかるようなことになれば教育にも意味があるかな、という観点から聞いていたのですが、それに関してはどう思われますか。

大國先生：今やっている段階ですと、直接学生に手伝って貰うには少し無理があると思えます。むしろ教育ということ考えるのであれば、今後こういった資料をどう扱うのか、というデータアーキビストみたいなそういった人たちが、例えば学芸員の人達の中でもそういう紙媒体の資料を取り扱うというような、専門的なスキルを必要とするような、そのような状況がこの先、恐らく出てくると思えます。ですからデータアーキビスト養成の課程のようなものを考えていくということは出来るのであろうと。ただもちろん、我々のほうは本当に、それこそ今、小出先生がいらっしゃるので少し恥ずかしいのですが、博物館の学芸員の方達が持っているようなスキルというのと、今ここで私がこういうふうなことが出来ると良いかと考えているものとか、どういうすり合わせが可能なのかというのは、これから先の課題だと考えています。

司会：他にいかがでしょうか。

B：単なる感想なのですが、考古学みたいなものとして書いた、例えば一億年前に恐竜は何を食べていたとか、未来の社会がどういう関心を向けるか、歴史とか、そういう視点から見ると非常にどういうデータをどのように整理するのかは、非常に今の段階でないと難しいような気がします。その辺はシステムとして長期に出来るだけ多くの資料を利用し

やすい形で残しておくのは非常に大事なことでないか。今、研究など色々聞きましたが現にやっているデータ、その他をどう位置付けるか、今の時点だけでは色々難しい気がします。ですからまあ、何百年人類が生き残るかは分かりませんが、何かのテーマを持って何か資料が欲しいというような時にちゃんと活用出来るような、分類にしろ、何にしろ、検索し易いとか。例えば小説などのテーマでやろうと、色々調べて作家で色々な良い作品を作るなんていう現場がありますよね。まあ、そういうことを考えると単に平凡な数で潰れてしまったと。人間の生活、そういう部分を、いつかどういう形である意識に、課題意識などに戻る、必要とすることもあるかも知れない、それを出来るだけ正確な内容で伝えられるようにすることが非常に大事なことだと思えます。

大國先生：おっしゃる通りだと思います。今炭婦協の話の少しさせて頂いて、運動論的な部分は大体決まって来ている部分も見えているので良いのですが、地域、特に北海道の地域の活性化というような観点から、全盛期に非常に積極的に活動していたような婦人団体、これが徐々に衰退していく訳ですね。全般的にはマクロな構造からは中間集団が衰退するという一言で説明が済んでいるかのように見えますが、それは地域ごとの様々な特別な条件や事情があって、そうになっていく。そういったものを今、先ほど少し触れましたが赤平や芦別など、個別の地域の比較を通して共通点というのと、地域固有の条件というのを割り出していく。そのように割り出していけば集めた資料をどのように分類して置くと、後々使い易いの、ということが導き出せる。ただ一般的にこうですよ、という話はなかなかそう簡単にはいなくて、それはかなりの量の積み重ねが必要だろうとは考えていますが、具体的な研究を通さないと資

料の整理の仕方であるとか、分類の基準であるとか、ということも出て来ないであろうというので、冒頭のところで SORD の課題として資料、データについてどうなのか、ということと、それを使った研究をやる、ということの二本、学術的な課題があるという話をしましたが、先生のおっしゃることのポイントだと思います。

司会：他にはありますか。

B：もう一点ですが、ここで色々を集めるのでしょ。将来的にはどのような形で残すのでしょか。

大國先生：そこまではさすがに恐くて想像をしていませんが。

B：苦労したあの結果が、どこかでシステムダウンしてぱっと無くなってしまふ。何とかちょっと何らかの形で、古い資料やこういうデータも末永く、これは一大学の問題だけではないですね。やはり残す価値がある。これは方々にあるということですか。

大國先生：もちろん、データのバックアップに関しては。

B：いや、バックアップって。

大國先生：バックアップについては良いのですが、例えば SORD という組織が今後 100 年継続するとは考えていませんから、まずは 10 年行くのか、という話のところから始まると思っています。今のところはとにかく予算の問題が近々の問題なので自力で獲得するということしか考えていません。しかし、実際にはそれでも施設問題、要するに資料の保存場所というのが、もうそろそろ C 404 号室だけでは危くなっているという実情もあって、そういったことも考えないといけませんし、そういう意味では非常に難しい課題が、今日触れていない部分でもたくさんあります。特に長期的な展望を持った時にはかなり困難が予想されるというのは確かだと思います。

B：出版物でもどこかの図書館に残っていたとか、ある程度こういう形でデータとして

大事な記録を残したにもかかわらず、将来に引き継がれていくのかという点で何か少し心配になります。

大國先生：おっしゃる通りだと思います。

C：ちょっとお聞きしたいのですが、一つは先ほどおっしゃっていた東大の SSJDA と立教 RUDA があって、そこの情報のリンク付けのようなことは、今後考えていくのかどうか、ということと、もう一つ、今やっているそのデータベースアーカイブズ化の中で、文書等保存をするのと同時にどうやってメタデータを付けていくのか、ということが今後の活用に凄く重要だと思うのです。例えば、炭鉱なら炭鉱とラベルを貼って行くんだとか、社会運動なら社会運動とラベルを貼って行って、どこかとちゃんとデータのリンク付けが出来るといふ、メタ化の作業がどのようにされているのか、で、さっき言った他の機関のアーカイブとそこの互換性、共通のフォーマットのようなものを考えてやっているのか、やっていないのか、細かいことですが説明をお願いします。

大國先生：まずリンク付け、要するにラベルをどう付けますか、ということについてはまだメタ的なものは全く考えていません。というのはリージョナルと偉そうに言っている部分もあるのですが、要するに SORD としてはこのようにやるのが好ましい、というところがある程度確定してこないと共通化、標準化の議論というのは他のデータアーカイブズとは出来ないという感じはしています。勿論 SSJDA などは国際的な舞台でやっているから、国際的な標準というものを持ってやっていると判断をしていますが、しかしそれは一方ではグローバル化の方向性の訳で、むしろ我々はリージョナルと言っている以上ローカルな訳ですから、ローカルなデータはこう整理した方が便利です、ということが言えるくらいまではローカルに徹しないとまずいな、というふうには思っています。勿論、伊

藤さんが今おっしゃったような課題は当然、将来的にはあることは分かっているのですが、それに向けてこそリージョナルである、ということに徹底しておかないとまずい、という判断は今のところ個人的には持っています。

高田先生：少し補足をすると、量的なデータに関してはSSJDAもRUDAもSORDも割とメタデータは共通していて、それはもう出来ているのですが、質的なことに関してはど

こもやっていないと思います。

大國先生：そうですね。

司会：他にどうですか。無ければ、大國先生にはまだ後ほどお願いします。次の準備のため5分ほど休憩をします。そのあと千葉先生のご発表に入ります。

司会：では千葉先生のご報告に入りたいと思います。ではよろしくお願い致します。